ありふれた日常

渦蔦楓月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ありふれた日常

【Ｎコード】
Ｎ９５７６Ｇ

【作者名】
渦蔦楓月

【あらすじ】
いつもと変わらぬ日常に退屈を覚える、高校三年の主人公、仁。
彼と彼らの仲間達が織り成す青春物語。

序章：いつもの日常（前書き）

青春の物語のつもりです・・・

序章：いつもの日常

暇だ・・・
実に暇だ・・・
いつもと変わらぬ教室、いつもと変わらぬこの窓から望む景色。
いつもと変わらぬ授業、いつもと変わらぬ先生の話。

俺の席、一番後ろの一番窓側―
そこはとても授業をサボるには快適な場所だ。
だが、最近はそこにいてでさえも退屈に感じてしまう。
何か面白い事はないだろうか・・・

そう思っていると授業の終わりを伝えるチャイムが教室に響いた。
だが、それが退屈からの解放であると言われればそうではない。

そんな事を思っていると、隣の席のうるさい奴が俺の方を向きやがった。
「はぁ～全く、亀吉の授業やってらんねーよなぁ」
そいつはノビをしながら俺に話かける。
ついでに亀吉とは俺らの先生のことだ。
だが、ホントに亀吉と言うわけではない。
いわゆるあだ名ってやつだ。
由来は話やら授業やらが亀並みに遅いからだそうだ。
何故語尾が、「そうだ」なのかと言うと俺も詳しい事は知らないからだ。
こいつが勝手に言ってるだけだから。
おっと、そう言えば名前をまだ言ってなかったけ、
俺の名前は加賀野（かがの）　仁（じん）
ついでにこいつの名前は絹川（きぬがわ）　春（しゅん）

よくつるんでる奴だ。
悪友とでも言っておこうか。

「で、仁どぉーする？もう、昼休みだけど」
春が不意に俺に尋ねてきた。
「ん、学食でいいんじゃね？」
俺は適当に返す。
別に昼食なんか何処で食っても一緒だし、何しろ考えるのめんどくさかったし。
だから、パッと思いついた事を口にする。
「まぁ、それが一番いいかぁ。手軽さ的には、よし妥当しよう」
何様のつもりだ御前は・・・御前から聞いてきたんだろうが・・・
まぁそれは心の中にとどめる事にしよう。

そして、俺は椅子を引き、立ち上がった。
「んじゃぁ行くか」
「あいあいさー！！」
そして、俺達は学食へと向かった。

序章：いつもの日常（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうゴザイマス。
できれば、感想などいただければ嬉しいです。
まだ、序章ですけど・・・
不定期更新になると思いますが暖かく見守ってください。

第一話：激闘！！学食での大合戦（前書き）

一応、これが一話目です

第一話：激闘！！学食での大合戦

食堂に行くと、相変らずの人の多さだった。
ここの学食は安さの割には結構美味しいのだ。
俺達は一番奥に一つ空いている机を見つけた。
「おい、俺、席見とくからいつもの頼むわ」
そう言って、さっさと奥の方の席に向かって歩きだした。
後ろから“あいあいさー！！”と、元気な声が聞こえた。

俺が席に着いてから数分経った頃、お盆を持った春が帰ってきた。
春はお盆から一つの丼と水を俺の前に置いた。
そう、俺がいつも頼んでいるカツ丼である。
そして、春は俺の隣の席に座り自分のお盆を置いた。
お盆の上には皿が二つと赤いジュースが乗ってある。
お皿の上にはトマトサラダとミートスパゲティだった。
もうお分かりだと思うが、赤いジュースと言うのは無論トマトジュースである。

「またかよ・・・」
俺は思った事を口にする。
「やっぱり、トマトは裏切らないからね～トマトＬＯＶＥ」
そんな事を呑気に口にするが、俺にはよく分からない。
別にトマトが嫌いだと言うわけではないが、そんなにも好きではない。
「まぁいい、食うか」
「いただきまぁす～」
俺は割り箸を割る。
今日は上手く割れたな・・・
そんな事を思いつつ丼に手をかけた。

その瞬間、聞き覚えのある声が聞こえた。
「前座ってもいい？まぁアンタらに拒否権なんてないけどね～」
顔を上げた。
そこにいたのは隣のクラスの藤野（ふじの）　梨佳（りか）と古川（こがわ）　晴海（はるみ）だった。
先程、自己中的な言葉を発していたのは藤野だ。
そして、横にいる古川は藤野とは全く正反対の性格だ。
「じゃぁ言うなよ！！」
春は言葉を返した。
「うっさい、トマト人間は黙ってなさい！！」
藤野は春にカウンターを放った。
「うぅ・・・」
クリティカルヒットだぁ！！
春に１のダメージ！！
春のＨＰは１になってしまった！！
「俺、どんだけＨＰ少ないんすか！！」
「梨佳、いいすぎだよ・・・その、ほらトマトは美味しいじゃん・・・」
古川の回復魔法が、発動した！！
「古川ぁ～」
春のＨＰがみるみる回復していく！！
「あれ、でもアンタ、トマト苦手じゃなかったけ？」
「え・・・あぁ・・・」
古川の会心の一撃ぃ～！！
「ぐふぁ・・・」
春は戦闘不能になった！！

その戦いを夢中になって見ていた俺の方に藤野が冷たい目で見てきた。
「アンタ・・・さっきから、うるさいわよ・・・」
「え・・・」

あれ、俺口に出してた・・・
しまったぁぁぁぁぁぁすげぇ恥ずかしい奴になってるぅぅぅ
何か周りの目線が怖い・・・
俺は戦闘不能になった。

第一話：激闘！！学食での大合戦（後書き）

何か、意味不明になっちゃいましたね・・・
ちょっとふざけて見ました～

第二話：トマトへの情熱

俺が黙々とカツ丼にカブリついていると、藤野が口を開いた。
「そーいえば、智がいないわね。どーしたの？」
俺が顔を上げると、藤野の天ぷら定食が見えた。
「あーそういや、今日来てないな」
俺は一言そう言うと、もう一度カツ丼を口にほおばる。
横では春が、さもおいしそうにトマトサラダを食べていた。
「アンタね・・・友達でしょ。そんなんでいいの？」
藤野が呆れた様な口調でそう言った。
俺はもう一度、顔を上げた。
その瞬間、古川と目が合ったがすぐに伏せられてしまった。
俺、何かしたか・・・？
そんな事を思いつつも、素っ気なく言葉を返す。
「まぁアイツもたまにはサボりてぇんじゃねぇの。いいんじゃねアイツはダブることねぇし」
「はぁ・・・アンタ、ちょっとは心配しなさいよ」
と、言われましてもね。

智と言うのは、鹿野原（かのはら）　智（とも）　鹿野原財閥の社長の一人息子だ。
鹿野原財閥って言うのは、この街、いやこの国でも、1，2を争う大きな財閥だ。
智はその次期社長って事になってる。
まぁそんな奴がどうしてこんな学校に来てるのかはよく不明だ。
でも、アイツが欠席なんて事は今まで見たことない・・・
そんなこんなでちょっと心配する俺であった。

そして、カツ丼の最後の一口を一気に口に頬張った。

横を見ると、全て綺麗に食べきっていた皿がお盆の上に置いていた。
そして、俺は席から立ち、春に合図を送った。
「じゃあ、俺ら行くわ。じゃあな」
「バイバイ」
「さようなら・・・」
俺達は藤野達に別れを告げ、学食からさっと、出て行った。

「いや～やっぱりトマトは最高～～～～一日三食トマトでもいけるよ～」
教室に戻る途中に春が言った。
「いや、お前は実際そうだろ。ど～せ、また朝っぱらからトマト食ってきたんだろ」
俺は皮肉っぽく返した。
「ん～実際トマトは食ってないけどね～トーストにトマトジャ・・・」
「待て、もういい！！お前のトマト雑談何かもういらない！！誰も求めてやしない」
俺は春の言葉を慌てて遮った。
これ以上喋らせていると、もうどうなるか分からないからだ。
最終的に小1時間、話された事もある。

そうこうしている内に教室についた。

第二話：トマトへの情熱（後書き）

はぁ何か、全然物語が展開しない・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9576g/

ありふれた日常

2010年12月11日02時43分発行